

現地社会への内外からのアプローチ

—IAHA 第 18 回大会報告より—

菅原由美・山本博之

The International Association of Historians of Asia (IAHA) 第 18 回大会は台湾で開催され、報告は 3 日間、台湾中央研究院の広大な敷地に散在する 9 つの建物の 17 の部屋で、多数のパネルが同時進行した。相互に関連するパネルが同じ時間帯に行われるケースが多々見られたため、その中から自分が参加した幾つかのパネルを紹介する。

1. Java in the Eighteenth Century

オランダ、レイデン大学博士課程の学生によって開かれたパネルである¹。3 つの発表ともに、オランダ東インド会社(VOC)史料を駆使して、18 世紀のジャワ各地の社会状況の分析をおこなっている。特に、VOC の政策に対する現地社会の反応について詳細な記述をおこなっている点が興味深かった。Kwee は、VOC の占領による 1743 年以降のジャワ島北海岸への影響を、特に徴税請負制をめぐる VOC とジャワ人貴族層(プパティ)と華人、三者間の駆け引きをテーマに論じている。太田は、18 世紀後半西ジャワにおける砂糖産業をめぐる VOC の政策と現地社会の環境変化について記述している。VOC の砂糖

¹ 報告は以下の通り。Kwee Hui Kian, “Trade-Offs, Gambles and Capitalization: Tax Farming on the Java’s Northeast Coast, 1740-1790s”、太田淳 “The Sugar Industry in East Banten and Tangerang in the Second Half of the Eighteenth Century”、Sri Margana, “Free Trading and Resistance in the Island of Evil, 1770-1800”。

産業政策については、特にこれまで日本市場と日本の銅輸出の影響について考慮されてこなかった点に着目した。また、報告者は現地社会との関連で、薪、労働者、阿片の調達に砂糖産業展開の鍵を握っていたこと、しかし、その一方で華人の増加により VOC が認可を与えていない貿易が増え、VOC の支配力が低下したことを指摘した。Sri Margana は、マカッサル戦争(1666-1669)により生じたブギス人ディアスポラを背景に、18 世紀末のジャワ東海岸に展開した、様々なエスニック・グループから構成されていたディアスポラ・コミュニティをテーマとしている。1767 ~ 68 年のオランダによるジャワ東端 Blambangan 鎮圧後、東ジャワ南方に位置する Nusa Barong 島に、ブギス人、バリ人、マンダレー人等からなる抵抗グループが「自由貿易」のために新たに貿易拠点を作った。しかし、1777 年にはオランダがこの島に遠征をおこない、抵抗勢力を殲滅した。1790 年代、オランダの対移民政策の軟化により、ブギス人・マンダレー人の集団が再び燕の巣採取のために、周辺地域に居住地を構え、オランダともしばらくは平和な関係が続いたが、小さな誤解がコミュニティの長の処刑につながり、再び一帯は無人の地と化した。この事例は、ブギスとオランダとの緊張関係が簡単に解消されるものではなかったことを明らかにしている。

2. Pioneers in the Long-distance Trade:

Chinese Traders in the Greater South China Sea Region, 1620-1820

このパネル²は、様々な史料に残る、マレー諸島地域で活躍した華人商人の活動に関する研究の現状と展望を考えるものであった。

Blusse は、タクシン及びラーマ 1 世の時代の外交史から、シャムと VOC の文通上のやり取りを一例として、華語が外交言語・商業言語として重要な役割を果たしていたことを主張する内容であった。Wade は、1740 年の華人大虐殺事件の後、バタビアの華人居住者保護のため 18 世紀半ばに設置された公館の史料を用いた華人の経済活動分析である。同史料には、18 世紀末から 20 世紀初頭の華人の結婚・離婚・死亡、そして華人評議会会議記録および、同評議会が経営していた不動産、寺、慈善団体について記録が含まれており、会議記録には、経済活動によって生じるさまざまなトラブルとその解決の記録が記載されている。またバタビア内での活動だけでなく、島嶼間での華人商人間および現地人首長たちとの経済的関係についても具体的な事例が記録されていることが紹介された。Fernando は、VOC 文書に含まれているムラカのシャーバンダール記録 (1677-1792) 及び comptoir 記録に見る 1640 ~ 1820 年代 (17 ~ 18 世紀) の華人の交易

活動分析である。「交易の時代」の後半以降における華人の商業活動の成長について注目した。1620 年代まで華人は西欧と中国を結ぶ長距離貿易の影響を受け、東南アジア島嶼部において、バタビアを中心に、アチェ、ムラカ、ジャワ北岸都市に広く分布していた。バタビアがジャンク船貿易を禁じたことによって、島嶼部の交易活動は打撃を受けたと考えられてきたが、実際には 1680 年代以降、華人は地域内交易活動に従事し、1790 年代まで華人による交易活動は増加した。18 世紀初頭、ムラカでは、マレー人同士の衝突の結果、華人商人が第二の勢力に成長し、その後は地方の有力者と関係を結ぶことによって、華人は交易の基盤を各所に築いた。1740 年以降、ジャワからの交易は激減し、18 世紀後半はマレー半島に交易の中心が移り、1770 年代までには、華人はマレー人商人を抑えるまでにいたった。1780 年 ~ 1820 年代は政治的にも経済的にもこの地域に住民には混乱期であった。商業経済から産業経済への経済構造が転換し、新しい経済秩序に向けて、再調整を行わなければならない時期であり、このとき、ムラカから、シンガポールに交易の中継点が移動していったとする。

両パネルとも、VOC 史料および新史料の開拓によって、現地社会の動きに忠実な歴史叙述を目指していた。17 ~ 18 世紀東南アジア島嶼部の歴史研究の最近の動向をあらわす内容であったと思われる。(菅原由美)

私が参加したいいくつかのセッションで印象的だ

² このセッションの報告は以下の通り。Leonard Blusse “Siamese-Dutch Relations and the Chinese Go-Between”、Geoff Wade “Chinese Economic Activities in Java in the Late 18th Century as Reflected in the Batavian Kong Koan (公館) Records”、M.R. Fernando, “Mercantile Practices of Chinese Traders in the Malay Archipelago, 1620-1820”。

ったのは、若手研究者が自らの属する社会のあり方にコミットしようとし、そのために既存の研究に挑戦して新たな歴史像を描こうと意欲的に臨んでいたことであり、また、それに対するベテラン研究者たちの態度がはっきりと二分されていたことだった。ある人々は、その研究の発展上にどのような意義がありうるかに目を向けさせようと問いかけ、別の人々は、発表者が批判しようとした通説をそのまま語って聞かせようとした。

インドネシア華人に関する若手研究者のセッションでは、司会のアンソニー・リードが、民主化の進行とエスニックなアイデンティティの興隆を前にインドネシアの将来はどうなるのか、そしてその中で華人以外のマイノリティはどうなるのかと問いかけた。コメントしたワン・グンウーは、華人社会では権力を握った者が富裕になることはあってもその逆に富裕であることが直ちに権力を生むわけではないと指摘し、華人社会では経済力が政治力に結びつかないのはなぜだろうかと問いかけた。ワン・グンウーはさらに、改革の時代になってインドネシアにおけるあらゆる対比が質的な変容を遂げているのに、なぜ華人とプリブミという対比だけが依然として変化せずに残っているのかという問いを投げかけた。この問いかけに対してフロアのアフマド・アダム(サバ大学)が、マレーシアとインドネシアのいずれにおいても原住民は1920年代にナショナリズムの時代を迎えたが、対して華人は1950年代になってからナショナリズムに目覚め、そのために2つの異なる民族意識が生まれたとコメントした。

フィリピンにおける主流派による歴史像の見直しを試みた別のセッションでは、フィリピンのカトリ

ック系の学校教科書がムスリムを「彼ら」と呼び、「私たち」とは異なる存在として記述している箇所を挙げて、キリスト教徒がイスラム教徒を同胞として見ていないことの表れであると批判する報告があった。キリスト教徒のフィリピン人である報告者たちは、自分たちはフィリピンで優位集団として権益を享受しており、国民の融和のためには主流派による自己批判が必要であると訴えた。これに対してフロアのラムラ・アダム(マラヤ大学)は、マレーシアはフィリピンと違って異民族に寛容であり、マレーシアにはムスリム以外の住民もいるが、私たちは彼らが自分たちの信仰や生活習慣を維持することを許しているとコメントした。

通説に対して挑戦的であろうとする研究発表は、時に先行研究や他地域の事例を十分に踏まえていないと映ることもある。研究発表会である以上、発表が不十分だと思われたとしたら発表者に責任があり、フロアから厳しいコメントが出るのはおかしいことではない。また、ベテラン研究者ともなれば、発表内容をざっと聞いただけで、通説を紹介することでばっさり斬ったことにするのもたやすいだろう。その意義を否定するつもりはないが、報告者の思いがまったく届いていないように見えたのが残念だった。そのような「ベテラン研究者」は今回2人しか出会わなかったが(この2人には複数のセッションでしばしば出会い、どのセッションでも似たような印象を受けた)、どちらもマレーシアの国立大学に属して社会的地位を確立した研究者であったことがマレーシア社会のありようの一端を見せているようであり、興味深く、そして悩ましく思われた。(山本博之)